

## 2) 過食症 精神療法が効果的であった ケース

症例 22歳 女性 神経性大食症 (F50.2)

初診時主訴；過食と嘔吐が止まらない、太るのが怖い 家族歴；精神疾患の遺伝的負因はない。既往歴；虫垂炎(13歳) 生活歴、現病歴；小さい頃からあまり自己主張しない子だった。周囲を気にし見栄を張る所があった。中学生からやせ願望はあったが、拒食や体重減少の既往はなかった。21歳頃から過食と嘔吐が始まる。短大卒業後室内装飾の会社に入社。X-1年春頃より顧客との対応でミスが重なり、さらに資格試験の不合格が契機となり、過食と嘔吐が始まり、肥満恐怖も加わり初診となった。

診断とその根拠；短時間に大量の食べ物をたべつくす過食のエピソード、自ら誘発する嘔吐、肥満への病的な恐れなどが顕著に存在するので神経性大食症 (F50.2) と診断した。

治療方針と治療経過；本人が投薬を嫌がったので、精神療法だけで治療を開始した。以後の精神療法の治療経過を前期 (X年3月～X+3年11月)、後期 (X+3年11月～X+15年7月) の2期に分けて述べる。前期の初期の面接では、「太るのが怖い。父に(嘔吐は) “蛇の真似して出すようなもの” と言われ腹がたつ。ちっとも分ってないのに分かったように言う、やり込めるとオレは出て行きたいなんて言い出す」「過食の原因は考えてるけど分かんない、目標を立ててそれができないと過食になるみたい」「自分が中心じゃないと嫌、新人がチャホヤされるとすごく嫌、弟なんかいない方がいいと本当に思った。母が口うるさい。一人で何かしたいと思っても母の干渉でできない。でも母には嫌われたくない」と、父との病的共生関係や、分離不安・幼児性等の自我脆弱性が顕著に認められた。本人の面接と併行して両親の面接も行った。父親は「昔風のしとやかな女性になって欲しいのに、飛んでる女の本ばかり読んでいる」と不満を述べ、母親は「職場への不適應と試験の失敗が関係してる」と冷静に分析した。半年程すると一方的に自分の想いを語り続けるだけでなく、少しずつ「友達にも完璧主義といわれる。昔は太るとどうしようと思って何もできなくなっていた。今は食べ過ぎたら減らすようにしようとして、できるようになってきた。」と健康な自我の芽生えを示し始め、あれほど苦労させられ発病の契機になった資格試験にも合格した。しかし過食と嘔吐は変わらなかった。自我が成長して来ると両親との意見の違いを強く感じ始め過食も悪化してきた。

そこでX+1年7月から親からの精神的自立を目指して一人暮らしを始めた。また仕事だ

けの両親の人生に疑問を感じ始め、今の会社だと残業が多く自由な生活は一生不可能と思い、X+2年1月自分の意思で退職した。

しかしX+2年6月某コンピュータ会社に契約社員として入ったが、9月頃から要求されるレベルが高すぎてパニック状態に陥る。来院の度にクロロプロマジンの筋注（20mg/日）と、同剤の内服（38mg/日）が必要になる期間が半年程続いた。運の良いことに、患者を叱責してストレスを与えていた女の上司が辞めて居なくなってから徐々に症状は安定して行き、やがて薬は必要でなくなった。後期に入ると、より良い条件の職場を見つけられる様になり適応にも少し自信が付き始めた。

X+5年頃からは恋人探しに話題が集中し、過食の訴えは激減して行った。その後は失恋したり、自分から断ったりを盛んに繰り返した。このような男性遍歴は自我の成長につながり、行く行くは過食症も克服できるだろうと励まし続けた。しかしX+8年暮頃になると意中の男性への幻滅と、上司からのリストラの脅しの二重の圧力の中で働く意欲が薄れ転職を決意して辞職。簿記の学校にも通ったが好きになれず自己不全感に陥って行った。

そこで準看護婦を勧めてみると、直ぐに自ら準看護学校を訪問し、X+9年9月入学となった。入学後は授業内容が非常に面白く、熱心に勉強を始めた。成績が上がるたびに先生からも認められ、どんどん自信に溢れるように変わって行った。より深く看護を勉強したくなり、X+11年12月高等看護学校に受験し合格。X+15年4月から某公的病院に勤め始めた。一方恋愛の方は、これまでは知らない間に父に似た男性ばかり選んでいて失恋を繰り返していたことに気づいて行った。X+13年9月頃に出会い系サイトで知り合った8歳下の男性と急速に恋に陥り、X+14年7月には入籍をすませ仕事も結婚生活も順調という事で治療終了となった。X+15年1月外国の保養地で身内だけで挙式し、その後は幸せだと報告して来た。

考察； 1)本症例では環境への不適応状態が顕著になると過食衝動が高まるだけでなく、一時は感情失禁状態に陥った。その際はクロールプロマジンの筋注と内服が非常に有効であることが経験できた。2)過食症の治療では薬物治療だけで回復するケースが極めて少なく、精神療法を通して自我機能の回復と成長を目指す治療法の方が有効なことが多い。この症例でも治療者に理想化転移をして、直面化や解釈を素直に受け入れて成長し寛解に向かったと思われる。

